第３回　神とは？

問１　それでは聖書に記されている神様とはどのようなお方なのでしょうか。

答　すべてのものお造りになった創造主なる神様のことです。別の表現で言うならば、全被造物の根源なるお方です。

問２　それでは、神は誰が造ったのですか。

答　神は造られたお方ではなく、最初からおられた方です。

問３　私たちは、神様をどうして知ることができるのですか。

答　神様は、私たちに宛てて書かれた手紙のように、聖書の中にご自身のことを詳しく語っておられます。

問４　神様は何を造られたお方でしょうか

答　神様は人間を造られたお方で、人間が住む環境を全部お造りになりました。

問５　私たちは両親から生まれたのに、どうして神が造られたというのですか。

答　両親が偶然出会って、偶然に私たちが生まれたのではありません。神のご計画によって導かれ、私たちが生まれるようにされたのです。

問６　それが、神様が私たちを造られたということなのですか。

答　そうです。世の初めから私たちが生まれるように計画し、私たちと契約を結ぼうとして造って下さったのです。

問７　しかし、神様は見えないのに、どうして存在していると断言できるのですか。

答　見えないけれども実在しておられることが、そのお働きによって分かります。

問８　神様はどのような方法によって造られたのですか。

答　神様は、ただお言葉を命じただけで、無から創造されたのです。

問９　神様が、この私を造られたということを信じることが必要なのでしょうか。

答　その通りです。神は他の誰でもない、この私を造りたいために世界を造り、契約を結びたいと思われたのです。

☆　解説　☆

聖書とは、神が私たちに語りかけて下さった力あるお言葉だと言ってきましたが、それでは、それを語って下さった神様が、どのようなお方であるかということを知らない限り、神のお言葉だと言っても信頼して聞くことができないでしょう。

それでは、聖書の中で明らかにされている神様とは、どのようなお方であるのか、それをご一緒に見ていきたいのですが、なぜそのことが大事なのかを思って頂きたいのです。例えば手紙をもらったとしましょう。その手紙がどのような人物から送られてきたものかを考えもしないで読むことはないでしょう。

手紙の送り主が、私にとってどのような関わりのある人なのか、親族か、友人か、尊敬すべき人か、大切に思う人か、その重要性を思い浮かべつつ、その内容に目を向け、そこに語られている内容に思いを傾けるはずです。

そのように、聖書は、神様が私たちに宛てて、私たちにご自身のことを明らかにしたいと願って、思いを込めて書いて下さ

った手紙だと思って間違いではありません。それ故、聖書に明らかにされている神様とは、私たちにとってどのような存在であり、どのような関わりがあるお方なのか、私たちの人生との関係を知ることなくして、その手紙を読んで、その内容に思いを傾ける必要性が感じられないでしょう。

まず理解する第１の点は、神様とは、私たち人間を造られた創造者であると言われています。これが、私たちが神様のことを知らなければならない、もっとも重要な理由だと言えます。

すべての事物には必ず製作者がいます。確かに偶然の産物のようにできたものがあると考える人もあるでしょう。しかしそれで説明できないものは無数にあります。例えば、精巧な腕時計があるとしましょう。ある人は、それが何千年、何万年と日が経つ内に、いろいろな材料が偶然のように集まってきて、偶然にこのような腕時計ができたと言ったらどうでしょうか。このような説明に納得できるでしょうか。

もっと高度な、はるかに精密な部品の集まり（脳、目、耳、口、鼻、臓器、手足だけではなく、知識、感情、意志をつかさどる心なども含めて）だとも言える人間が、長い年月の間に偶然が重なって出来上がり、進化してきた結果、今の人間がある、そう教えられて、そう信じて安心し、自分に与えられた人生の深い意味が納得でき、それによって生きていく力が湧いてくると言うならば、そう考えてもいいでしょう。しかしあなたは、それで納得できるのでしょうか。

聖書には、はっきりと次のように記されているのです。人間は、あるお方によって造られた驚くべき霊的な存在（創造者である神様のことを思うことができる心、知恵、意志を持っている存在）であると言われているのです。確かにそう言われても、それを簡単に信じることはできないでしょう。

ある人は言うでしょう。それをどのように証明することができるのか、人間を造った偉大な製作者である神がいるというなら、その神を見せて欲しいと。その疑問を持つのは当然のことで、分からないこともありません。しかし、その創造者である神様が、どのようなお方であるかを分かってもらえるようになるならば、人間的な証明ができるならば信じてもいいが、納得できなければ信じることができないというような、人間の側の納得できるかできないかによって判断するような、ちっぽけな存在ではなく、それを超越した存在であるということが分かってもらえるでしょう。それを１回で語り尽くすということは不可能ですから、せめて２回に分けて解説することにしましょう。

見えない神を信じるということが、いかに信じにくいことであるか、それはいつの時代においても変わりません。ですから、神様もそのような人間の思いを酌んで、一度だけ見える形で現れて下さったと言われています。それがイエス・キリストです。

もちろんイエス・キリストを見て、あれが神様の形なのか、人間どう違うのかと思われるでしょう。イエス・キリストは、確かに人間の形を取って下さいました。しかし、ただ人間なのではなく、神様が人間の姿を取ってこの地上に現れて下さったと言われているのです。

本来神様は、形のない霊的な存在なのです。聖書の中に、「神は霊である」と言われている箇所があります。（ヨハネ４：24）聖書で言っている霊とは、形のない空中を浮遊しているような存在というのではなく、目には見えないが実在しているということを意味しています。

神がもし、霊的な存在でなかったとしたら、どこにおいても神様を見上げるということができず、神様がおられる所まで言って会えるようにしなければ、会うことも、話すこともできま

せん。形ある場所に飾ってあるような、神はそのような場所に限定されるようなちっぽけな存在ではないのです。地球上どこにおいても神はそこにいて下さり、そこでお会いすることができるのです。確かに、人間の５感で感じ取ることができませんから、そこにいて下さると言われても分かりません。信じるしかないのです。

もしそうであるなら、人間がそう思い込んでいるだけではないのかと言う人もいるでしょう。考えてみて下さい。風があっても、私たちの目には見えません。ただ風が木を揺らし、頬に当たり、ほこりを舞い上がらせるなどの風の働きを見て、そこに風があると信じるのです。風の場合は目に見えなくても、まだ５感で感じることができますから、疑いませんが、神様も目には見えませんが、信じる者の上に助けを与え、導きを与えて下さいます。信じて従う人にはそれを感じることができるようになるのです。

すなわち、神様とは、人間にとっては、言わば空気のような存在です。どこにいても離れることがありません。聖書の中で詩人がこう歌っています。「わたしは、どこに行って、あなたの御前を逃れましょうか」（詩篇 139：7）すなわち、人間のような限定された一つの所にいる存在ではなく、すべての所に存在できるお方であり、私たちのことを見て下さっており、私たちのためにあらゆる働き掛けをして下さっているのです。

そのような形のない、目に見えないお方が、一時的に限定された人間の形を取って現れて下さったと、聖書に記されているのです。それがイエスという歴史上の人物です。このお方がある時言われました。「わたしを見た者は、父（この地上に遣わされたイエス様は子なる神と言われ、イエス様は、創造主なる神様を父と呼ばれ、父なる神様であることを示されました）を見

たのである」と。（ヨハネ 14：9）すなわち、この私を見れば、外見ではなく、神がどのようなお方かが分かると言われたのです。こんなことが言えるのは、人類の中でこのお方だけです。こんなことが言えるのは、大ぼら吹きか、本当に神なるお方か、どちらかです。

確かに、私は神だと言って人々をだますペテン師は、いつの時代にも現れます。イエスもそれと同じようにペテン師なのでしょうか。もしそうであったら、二千年の長い間、世界の何十億、何百億の人々がだまされ続けてきたことになります。それほど人々は馬鹿なのでしょうか。

世界中の人々は、このお方に神様を見てきたのです。それは思い込みでも何でもありません。真実です。もちろん神様と言っても、私の人生に全く関わりのない神様なら、いてもいなくてもどちらでもいいのですが、このお方が私の創り主であると言うなら、神様がおられるという事実は、非常に重要になってきます。

それでは、創り主なる神様についてもう少し考えて見ましょう。神様は人間を造るために、人間の住む地球と、生きるために必要なすべての環境とを造られたのです。もちろん地球だけではなく、それを取り巻く、その奥深さを極め尽くすことのできない宇宙のすべてをもお造りになりました。そこにどんな意味があるのか、すべて分かるわけではありませんが、すべてのものは人間のために創造されたと言われているのです。（ネヘミヤ９：６）

しかも、ただ言葉一つですべてをお造りになったと語られています。すなわち、神が発された言葉は、力そのものでありますから、即、実現を意味しているのです。天使ガブリエルが語ったと言われているお言葉が、ルカによる福音書に記されてい

ますが、そこには、「神には、なんでもできないことはありません」（1：37）と言われています。もしどんなことでもできない、力のないお方ならば、神とは言えません。もちろん、何でもできるお方だからと言っても、悪いこと、愚かなこと、無意味なことをなさるお方ではありません。それはきよいご性質を持ったお方だからです。ですから、きよいお心に沿ったことであれば、どんなことでもできるお方だと言うのです。

乙女マリヤは、このように語った御使いガブリエルの言葉を聞いて、何でもできる神様であるならば、この私が処女のままであっても、この私から、神の御一人子が生まれるようにされることも可能だと本気で信じたのです。すると信じた通り男の子が産まれ、人間には不可能なことを、可能にしてしまわれた、神の驚くべき御力を、マリヤは体験したのです。

神が、天地万物をお造りになったのは、何も存在しない所に、ただお言葉一つですべてをお造りになったのです。このような無からの創造は、人間には決してできないことです。どれだけ優秀な人であっても、すでに存在している材料を用いなければ何も造ることはできないのです。しかし神は、光を造り出す材料が何もないのに、ただ光あれと言われることによって光を造り出され、光だけではなく、天体も、陸や海、植物も、動物も、最後には人間をもお造りになったのです。

このような偉大なお方が、その被造物である人間と契約を結んで下さったと言われている内容を信じることが、キリスト教のいう信仰なのです。

すべてのものを意味なくお造りになったと言うのではなく、神は誰でもない、この私を、いやあなたを造って契約対称にするために、すべてのものをお造りになったのです。あなたと契約を結びたいと願っておられる神様を、ぜひ心に留めて頂きた

いのです。この神様が私たちのことについてこう言われています。（イザヤ 43：1,4）「あなたはわたしのものだ･･･あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの」だと。

もちろん、神が私を造られたと言っても、最初に造られたアダムのように、すべての人が土で造られるわけではありません。（助け手として造られたエバは、アダムのあばら骨の一部を取って造られました）それからの人間は、その人間を基にして子供が生まれていくようにされたのです。

神が、一人ずつ土から造られたというのであれば、この私の存在は、神によって造られたと言っても問題はありませんが、両親から生まれるようにされたというのであれば、親同士が出会って結婚するように導かれなければ、この私の存在はないことになります。結婚する相手は最初から決まっていたわけではなく、まして、両親の、そのまた各々の親同士も出会って結婚するようにされ、更にその元をたどっていくとすると、どこかで一人でも相手が変われば、今のこの私の存在はないことになります。ということは、神がこの私を造られたということができるなら、驚くべき神の導きの手が、世の初めから働いて、この私が生み出されるようにご計画なさったと言うしかないのです。もしそのような導きがあったと信じることができないなら、この私は、単なる偶然の産物でしかないのです。

しかし、聖書は言います。神は、この私という存在を造って下さった創り主だと。そして、この私と契約を結ぶことを、神は最初から考えて下さっており、人間の思いをはるかに超えた御力を持って、私の創り主となって下さったと言っています。

神のことを思わず、神に背を向けていた私たちのことを、神はご自身の方から手を差し伸べ、私の方に向き変わりなさい、そうすれば、私があなたの創り主であることが分かりますと言

われているのです。

確かに、神の方から手を伸べて、働き掛け、契約を結ぼうとして下さるのですが、人間の側でその契約を望まず、契約内容に従おうとしない人を、神は、愛したくても、その愛が通じないのです。神は愛と義という正反対のご性質を持っておられるお方なのですが、神は、そのどちらのご性質もゆがめられることなく、貫き通されるお方なのです。すなわち、神から背を受けている、罪の中にいる汚れた者たちを、何とか愛そうとなさるのですが、もう一方の義なるご性質は、そのような、罪から離れようとしない汚れた者を裁かずにはおれないのです。

この愛と義という 2 つのご性質を、ゆがめられることなく、通されるという驚くべきご契約を立てて結んで下さったのが、神が示して下さった福音（よい知らせ）なのです。この内容についての詳しい説明は、もう少し後でしていきますが、今日の所は、神がご自分の中に持っておられる２つのご性質を、僅かも曲げられることなく、人間を罪の中から救い、神の前に喜んで生きることができるように、ご自身の最高の知恵を絞って、このような神に背を向けていた私たちを、契約の相手として大事にしたいと思って下さったのです。